原子論と佛教

坂本幸男

一、希臘の原子論

唯物論は終戰後急激に思想界の表面に抬頭し、今日では好むと好まざるとに拘らず、其影響を蒙らない者はないであらう。抑も唯物論が創めて唱へられたのは、西洋では希臘哲学に於て原子論（アトム）が確立してからのことであるが、印度に於ては更に時代的に遡ることが出来る。勿論当時の唯物論は現代の精致なものに比すべくもないが、併し「物とは何ぞや」の根本問題が未解決である限り、東西兩洋の古き物の觀念を反省することは必ずしも無意義ではないであらう。

先づ西洋の原子論に就て見るに、原子論（Atomic theory）を最初に唱へたのは希臘のレウキッポスで、之を大成したのはデモクリトス（BC四六〇—三六〇）である。是より先へラクレイトス（BC五三五—四七五）は、世界の実相は運動で事物が固定してゐる如く見えるのは全く感覺の誤謬であるとなして彼の有名な「萬物流転（パンタレイ）」を唱へ、最も活動的な火を以て世界の原質とし、火から水、水から土を生じて萬物が生ずると説いた。是に対してエレア派のパルメニデス（五一五頃生）は運動と変化を否定し、運動と変化は感覺の幻影であり真の実在は不生不滅不動唯一連続の有（エイナ）であるとした。有は充実を意味し何等かの形体を具へた物体で、空虚と相反するから非有即ち空虚たる空間の実在

を否定する。併し一面感覚に現れる現実の世界を説明する段になると非有の存在を假定し、有と非有との混合に依て萬物が生ずると說いたのである。

抑も世界の原質の觀念を分析すれば実在と過程との二つになるが、パルメニデスは前者を强調し、ヘラタレイトスは後者を力說したようである。然るに現実を顧みれば実在と過程との兩者は其一を缺くことは許されない。そこでエムペドクレス（四三〇—四九〇）は実在の生滅を否定して生滅を以て感覚の誤謬に帰したけれども感覚的事実は之を拒み得ないで実在即ち原質に数種類を立てて其離合集散に依て生滅の現象を說明せんとした。即ち原質を地水火風の四元素に分ちしかも此等は自ら運動することが出来ないので愛憎の二力に依て機械的に離合集散して現象世界を生ずると見たのである。更に此エムペドクレスの元素說を徹底させるには元素を四に限らないで無数とし、且つ其性質的差別を認める、或は認めないか、の何れかの方向に進まなければならない。アナクサゴラスは前者の立場を取つて性質の差別に從つて無数の元素を立て、且つ元素を不生不滅不可見不可分の物体とし万有は是等の元素を悉く具してゐるが其分量の相違に依て性質を異にすると考へた。從つて一切の事物は皆同質である訳である。更に此元素を一切造物の種子（スペルマタ）と名け、亦自己の中に自ら動き他を動かす力を持つてゐるので生物体の靈智に比してヌースとも名けたが、併し依然として輕妙な物質に過ぎなかつた。是に反して元素の無数を許し乍ら性質的差別を認めないのがレウキツポスの原子說である。即ち実在は無数不生不滅不可分同一性であるが、唯分量の相違に從て大小形状位置の差別が生ずる。そして不可分の極微といふ意味でアトムと名け、其運動は全くアトム自身の重力に依るとし、運動の可能なためには有の外に空虛が実在しなければならないので遂にエレア派に反対して空間の実在を主張した。尙、レウキツポスの学說を繼承したデモクリトスに從へば、アトムの合離に依て現象世界は生滅するけれどもアトム自身は常住不可壞

であり、アトムが合離するためには運動がなければならず、運動が可能なるためには空間が実在しなければならない斯くてエレア派に反対して運動と空間との実在を主張し、アトム及其合成物の屬性を形態、大小、輕重、疎密、硬軟の五種に限り、此等以外の性質たる色香味等を皆現象的存在とし、前者を才一物性、後者を才二物性と名づけた。例へば煖は円いアトム、白は粗なアトム、黒は滑かなアトム、酸は小三角のアトム、甘は大円のアトムに屬し、特に火を球体と見る如きである。そして此等が唯一種類のアトムに屬すると考へたのは明かにヘラクライトスの影響である又アトムは重量に依つて無始より落下運動を続け、其間に衝突を起すと共に渦動を生じ、輕重相分れて現象の世界となるが、或る時期には全く破壞せられて更に復た成立し、斯くて世界は定期的に成壞する。又彼に從へば心は最も微小、円滑、輕妙な火のアトムから成立し、火のアトムは空間にも遍滿してゐるが人体に最も多く存在し、此アトムと物体のアトムとの結合に依て感覺が生ずると説く。例へば視覺は物体の表面からアトムが飛出し眼の上を圧して火のアトムに印象を與へるのである。尙、アトムの配列に就ては單に並んで横たわつてゐるに過ぎないと述べてゐる。

以上の如き純然たる唯物論的なアトム説が、希臘に於て確立したのであるが、詳細に考察すると色々な矛盾不合理を含んでゐる。即ち不可分なアトムに如何にして大小等の形状があり得るか。又運動するアトムが如何にして常住なり得るか。其他アトムの配列等、印度の極微論に較べて尙及ばないものがあると思ふ。

二、耆那教の原子論

翻て之を印度に見るに、既にチヤーンドーグヤ奥義書（紀元前八世紀—五世紀）に於て宇宙創造の根本原理で又萬有に内在する力と考へられた梵及び我を「小の極小」或は微と名けてゐるが、併しアトムの観念に達するには極小の観念が物質に適用せられるのみならず物質の不可壞性の観念とも結びつかなければならないから、梵及び我の極小を

以て直ちにアトムと見ることは出来ない。

印度にアトムの觀念が生じのは大勇（五四九－四七七）を開祖とする耆那教が最初である。從て其起源は希臘よりも早いことになる。其後勝論派はアトム説を基本的教義として取扱ひ大いに其論証に努めたので、正理派は勿論、瑜伽派や弾曼薩派の一部の者さえ之を採用した。併し吠檀多派からは鋭く攻撃せられた。又一方佛教では小乘の有部派や經量部派が之を取入れて佛教的に改造したけれども、中觀瑜伽の兩派からは嚴しく批判せられた。以下其等に就て少しく論述しよう。

耆那教世界觀の基本的原理は運動（ダルマ）、静止（アダルマ）、空間（アーカーシャ）、靈魂（ジーバ）、物質（プドガル）の五種の実体で、時間的には常住、空間的には無量の微点の聚りである。就中初の三は單一性不活動性、後の二は多数性活動性であり、又前の四が無形態なるに対して物質は有形態である。物質は性質と様態即ち觸と味と香と色と声と微細と麁大と形状と区分と闇と影と灼熱と光とを有して身体を構成し、且つ言語思考呼吸等の生命現象迄も其機能として有し、更に靈魂に苦樂を感ぜしめ生死を経験せしめる原因である。そして斯る物質に就てアトム即ち微（アヌ）（anu）が説かれる。微は物質を分割して極限に達した時を指すのであるから不可分割の極小色あるが、極大な空間が常住であると一般に信じられてゐる所から極小な微も亦常住であると推定せられた。一微は色味香を有し二微は觸を有するけれども微には声が無い。蓋し声は微の聚合たる蘊と蘊とが接觸する時発生するからである。從て色味香觸即ち地水火風に対應する異質的四種類の微が存在するのではなく、其点は希臘のアトム説に似てゐる。では如何にして地水火風が現はれるかと云へば是に就ては何等の解説も與へられてゐないが、恐らくデモクリストの如く分量の相違に依ると考へたのではなからうか。蓋し色味香觸は実在たる微の性質であつて無常なものと見做されてゐるからである。微は二個或は三個づつ結合し、結合の原因は微の有する

粘着性と乾燥性とに依り、其結合は短かければ一点時、長ければ不可計時である。但し等しく粘着性或は乾燥性を有し而かも其程度が同じである場合には結合しないと言はれてゐる。

三、勝論派の原子論

次に勝論派は世界構成の根本原理を実(ドラヴヤ)、德(ゲナ)、業(カルマ)、同(サーマーンヤ)、異(ビセーシャ)、和合(サーマヴァーヤ)の六種に纏める。就中実とは事物の主体に名づけ、屬性の中の静的方面を德、動的方面を業と名づけ、実德業の三者が不離の関係に在るのを和合と名づけ、此具体的事物の類概念及び種概念に相当するものを夫夫同、異と呼んだのである。更に此実の中に地水火風空時方我意の九種を数へ、地は色香味觸の四德を、水は色味觸の三德を、火は色觸の二德を、風は觸德のみを有するとした。物質が地水火風の四大から造られてゐるという考へは既にチャンドーグヤ奥義書以来一般に行はれてゐた思想であるが、今勝論派は此四大に夫夫対應する異つた微があると説くのである。そして微の存在を論証して「無常なるものは必ず常住なるものを予想し、聚合体は單体を予想するから、無常にして聚合体たる物質の根底には常住して單一なる実在が存在しなければならない。それが微である。而も微が我我の感覚に依て知覺せられないといふ理由で微の存在を否定するならばそれは無明である。そして此無明のあることが却て常住なる微に依て世界が造られてゐる証左である」と云ふのである。又正理派に從へば二種の理由に基いて微の存在を論証してゐる。才一は部分より成立するものは全体と呼ばれる。併し其部分も更に部分から成立してゐるから同時に復た全体である。斯くて部分の部分が無限に追来せられ、若しも最後の部分に至ることが出来なければ全体の觀念を考へることは出来ない。從て分割は更に分割することの出来ない極限に達しなければならない。其極限が微である。才二は若しも部分に分割することが無限に続いて終極に達することが出来ないならば、塵は其容積に於て大山と異ならないといふ不合理に陥入るであらう。何となれ

ば兩者の分割は無限に続くからである。故に不可分割の極小のもので最早や部分を有しないものが存在しなければならない。それが微である、といふのである。斯て其存在が論証せられた微は常住不変で如何なる場合にも生滅することなく、他を作る因ではあるが他に依て作られることの無い無始無終の獨立の実在で、其形量は球体である。又微の数は無数で、聚合して具体的事物を構成するが、其聚合の仕方は註釋家の間に異説がある。才一説は「一微は他の一微と結合して二微果となり、更に之に他の一微が合して三微果となり、乃至無数に至る」、才二説は「一微三微は物を構成せしめる力無く、凡て二微果を結合の單位とし、微は先づ二微果となり、次に二つの二微果が合し、次に三つの二微果が合するといふ順序である」。才三説は「一微と一微とが合して子微即ち二微果となり、二微果と一微が合して三微果となり、三微果と三微果が合して才七子微となり、此才七子微が一微と合して七微果となり、七微果と七微果が合して第十五子微となる」といふのである。又微の結合の原因に就ては世界構成の最初に於ては人人の行爲の結果たる業力を動力因とし実の微を質量因として壊劫中單獨に散在してゐた微の間に結合現象が起り、次才に世界が形成せられると見るのであるが、正理派の如く神の存在を認める学派では微の行動を神が指図するとも述べてゐる。

四、有部派の極微論（原子論）

耆那教と同時代に起つた佛教は吾々及び環境世界を色受想行識の五蘊の聚りであると見て、奥義書以来発達した「凡ての物に内在し内部から物を主宰する永遠にして唯一絶対者たる梵と其本質を等しくする我（アートマン）」を否定して諸法無我を唱へた。色（ルーパ）とは形質を有し変化し他を礙える物質を云ひ、受（ベーダナー）とは感情感覺、想（サンジュニヤー）とは表象觀念、行（サンスカーラ）とは意志意欲、識（ビジュニヤーナ）とは心の主体をいひ、世界は色たる外界と受想行識たる内界とから成立し、それ以外に獨立の我は存在しないといふのが五蘊説の意味で、是が佛教の根本的立場である。是を奥義書が精神活動を呼吸意語視覺聽覺の五種に纒めた

のに較べれば其抽象体系化に於て優れた能力を示してゐることが判る。又耆那教の運動静止空間靈魂物質の五原理が素朴的実在論的傾向の著しいのに比すれば五蘊説は稍々觀念論に傾むく様に見えるけれども、佛教は單なる觀念論ではなく物と心との関係の上に世界の成立を見るのであつて、是が所謂る縁起説である。即ち奥義書は最唯一の精神的原理たる梵から世界が生じたと考へて転変説を主張し、或は唯物論者は世界を種々なる素材の單なる集合に過ぎないと見て神聚説を唱へたが、此両説を止揚して「凡ては因縁に依て生ず」との新しい立場に立つたのが縁起説である。此縁起説に於ては凡ての物は因縁に依て作られたものであるから、其限りに於て凡ては無常でなければならない。従て斯る縁起説を説く佛教に於て原子説が果して許されるであらうか。

抑も佛教の原子説即ち極微論(パラマアヌス)は耆那教及び勝論派等の微説の影響を受けて紀元前後頃小乘有部派を中心として発達したものである。それでは如何なる理由に基づいて極微説を主張したかといへば、順正理論に従へば色が積聚して成れる最大量の身体は色究竟天であるから、之と反対に最小量は色聚を分割して其極限に達したものでなければならない是が一極微である。そして極微には実体がなければならない、若し実体が無ければ之を集めても聚色即ち具体的な物質と成ることが出来ないからである、といふのである。大毘婆沙論は感覚機関たる眼耳鼻舌身の五根と男女根と及び青黄赤白等の顯色と並びに長短方円等の形色との極微を説き、甚しきに至つては更に木火灰等にも夫々異つた極微があると説いた。何となれば若しも一極微に青色や、長形の極微が無ければ衆極微が集つても青色や長形と成ることが出来ないからであると主張するのである。是は量から質への飛跳を認めない立場で、アナクサゴラスの種子説に似た考であり、従つてデモクリトスのアトム説や耆那教が微を根本要素としての物質の実体にのみ限り、勝論派が地水火風の四大のみに限定したのと甚だ異る所で、極めて複雑な構造を有することになる訳である。ではそれ等の極微は一体

如何なる構造を持つてゐるのであらうか。それに就ては何等明示されてゐない。

抑々も有部派に於いては物質を構成する根本要素として堅濕煖動の性質と持攝熱長の働きとを有する地水火風の四大を立て、四大は各別に相離れて單獨で住することなく、必ず常に不相離の關係に在りつゝ其の量を増減し、四大が因となつて眼耳鼻舌身の五根と色声香味觸の五境と無表色（行爲の惰性）との十一種の物質を造るので四大を能造色と名づけ、十一種の物質を所造色と呼んでゐる。經量部派の如く能造の四大のみが実在で、所造色は能造色の差別に外ならないから假法であると主張する学派もあるけれども、正統有部派は飽く迄其実在性を固執した。そして能造の四大は所造の一極微を造ると説いてゐるが、若し四が合して一を造るとするならば、堅濕煖動の四種の差別は如何にして可能であらうか。恐らく四大の混合の比率の相違に依るのであらうと思ふが、其比率は明らかにされてゐない。極微を否定する昳檀多派の学説であるが、地水火風空の五唯（タンマートラ）が五大を造る割合は地大の場合は地唯が全体の1/2他の四唯が各1/8の割合だと説いてゐるから、或は多少の參考にはなるかも知れないが、併しそれにしても余りに機械的な嫌が無いでも無い。又極微は單獨で住すること無く必ず極微聚として存在し其最も簡單な場合は四大と色香味觸の四境との八種が俱生する場合であり、身根の微聚は此八種に更に身根の極微を加えて九種となり、眼根の微聚の場合は更に眼根の極微を加えて十種となるといふ工合である。蓋し眼耳鼻舌根等は身根を離れてはあり得ないからである。斯くて微聚は複雜な構造を持つことになるが然らば其等微聚各自の特色は如何にして知覺され得るであらうか。有る者は針の交つた綿に觸れば針のみが知覺されて綿が知覺されない如く勢用の強いものが明瞭に知覺されると説き有る者は堅を本質とする金も熔せば流動するが、是は金に水大がある証據である。即ち、条件の如何に依つて其本質の顯れ方に相違を来たすと云い、經量部派は或る部分が顯勢力として表面に現れる時は他の部分は潜勢力即ち種子と

して内在するからだと主張して必ずしも一定してゐない。

次に極微の形状に就ては前述の如く長短方円に各々極微があり、且つ若し一極微にして長等の形に非らざれば衆微聚集するも亦長等の形に非ざるべしと説かれてゐる点から考へると極微には夫々の事物に應じた形がなければならないことになるが、併し又一面から考へると極微は分割の極限であるから其点からすれば極微は形を持ち得ない筈である。何となれば若し形を有すれば更に分割し得ることになるからである。そこで有部派は極微無方分説を採用した。併し無方分説は前の極微に長等の形有りとする有方分説と矛盾するので、衆賢は其矛盾を打開せんとして觀念の上で分析して究竟に達した極微を假の極微とし、極微の和集せるもので我々の直接知覺の対象となる最小のものを実の極微と名づけたけれども問題は何等根本的には解決されなかつた。又極微は單獨で住すること無く、必ず聚合態として存在するとせられて居り、其聚合状態に就ては互に相觸れること無く一極微を中心に上下四方の六方から六極微が取り圍み七極微が一聚団をなすと説かれてゐる。蓋し若しも極微が一部分で相觸れるとすれば極微に方分があることになり、又全体で觸れゝば七極微が一体と成り終つて極微聚と成らないからである。併し若し極微が相觸れないならば勝論派の如く極微の衝撃に依つて声を発することが出来ないであらう、と非難するかも知れないが、有部派に於ては極微が互に接近する時未来の声の極微が生じて声を発することになるから声を発するためには極微が衝撃する必要はないのである。又極微は七個を一聚団として一微を生ずるが是が肉眼の最初の対象である。極微は一金塵を、七金塵は一水塵を生じ斯くの如く次第して兎毛塵羊毛塵牛毛塵隙遊塵と成ると説かれてゐるから、隙遊塵即ち空中に飛散する塵の $\frac{1}{83543}$ が極微の大きさとなる訳である。尚、極微が相觸れないで聚合して而も散亂したいのは風力に依ると云はれてゐるからそれは極微自からの中に有する風大の力に依るものであらう。其他極微の分布配列状態に就て見るに

眼根の極微は黒瞳子の上に薬杵頭の如く住在し、耳根の極微は耳孔中に燈器の如く、鼻根の極微は舌上に剃刀の如く身根の極微は身に隨つて戟稍の如く、女根のは女形中に皷鼓の如く、男根のは男形上に指環の如く住在する等と説かれてゐるが、此説に何程の眞実性があるか明かでない。恐らく当時の解剖学から得た知識を極微説で明説しようとしたものに過ぎないであらう。最後に有部派の極微論の最大特色は極微が無常であるといふことである。希臘のアトムでも印度のアヌでも世界の究極の單位として常住な実在であり、其れが重力或は業力に依つて離合集散して世界を形成するといふのであつた。然るに今有部派では諸行無常の鉄則に隨つて極微と雖も因縁に依つて爲作されたものである限り刹那に生滅する無常なものでなければならない。從つて極微には運動は有り得ないことになる。假使甲点から乙点に微聚が移動するかの如くに見えてもそれは感覚の誤謬である。即ち甲点に在つた微聚は最初の瞬間に滅し、才二の瞬間には乙点に幾分近づいた場所に新しく第二の微聚が生じて滅し、才三の瞬間には更に乙点に近い場所に新しく才三の微聚が生じて滅し乃至最後の瞬間には乙点に於て新しく才Xの微聚が生ずるのであつて、是は恰も將棋の駒を一列に立て並べて其一端を突けば最初の駒が倒れ次ぎ次ぎと倒れて最後の駒が倒れるが、其際駒は移動したいに拘らず唯倒れる駒の間の因果の関係に依て移動したかの様に見ゆるが如きである。又静止してゐる如く見ゆる時でも瞬間々々に絶えず前滅後生前滅後生と新陳代謝してゐるから謂はば不連続の連続である。斯くの如き不連続の連続に於て極微は実在し乍ら業力に依て離合集散して世界を形成してゐるが、一度劫滅時に臨めば全部の極微が滅して殘存しない。此点は勝論等が壞劫時には極微は散在するも破壞せずと見るのと異る所である。以上に述べた所に依て有部派の極微説はアトム説やアヌ説に較べて可なり複雜な構造を持つものであることが理解せられるであらう。

五、極微説に対する大乘の批判

最後に極微説に対する中觀瑜伽兩派の批判を見ることにしよう。先づ中觀派の百論は勝論派が「極微は円体にして常住なり」と主張したのを破して、勝論派は（一）二極微が合して一微果と成ると説くけれども、其合する時に全体で合するとすれば二極微は一極微の体と成つて微果とは成り得ない。之に反して一部分で合するとすれば合する部分と合しない部分とを生じ從つて極微に方分が有ることになる。方分が有れば更に分割せられるから無常であつて常住ではあり得ない。（二）此非難を避けようとして極微は無方分なりと説くならば、無方分なる真の実在は唯虚空のみであるから極微が虚空なりといふ不都合を来たすであらう。そこで極微を有方分なりと云へば有方分なるものは必ず分割せられるから極微は無常となり極微常住説に反することになるであらう。（三）勝論派は地の極微に色味香觸の四德を具すると見るが、既に四德の区別が存する限り極微も亦それに隨つて区別せられるから有分と云はねばならず有分なるものは無常である。（四）極微に形相があるとすれば長短方円等の何れかの形相である。然るに形相あるものは有分であり、從つて亦無常でなければならない、と云ふのである。此論難は一人勝論派のみならず希臘のアトム説も亦受けなければならない批判である。更に瑜伽論も勝論派を攻撃して（一）極微は觀念の上で分析して到達したもので吾々が直接経験したものではないから、常住な極微の実在を是認することは出来ない。（二）無常な聚合物の根底には常住にして單一なものが実在しなければならないと主張するけれども常住なものが如何にして無常なものゝ原因となることが出来るであらうか。（三）不可見の極微は之を二個集めても不可見であるべき筈であるに拘らず、二個合した子微果は二極微と等量であると云ひ乍ら然かも可見であると云ふのは不当である。蓋し全体を單なる部分の集合とのみ見るのは不合理であるからである。（四）極微から麁果を生ずるのは種子から芽を生ずるが如き関係であるか、或は陶師が瓶を造るが如き関係であるが、若し前者であるとするならば芽を生じた時は種子が滅する如く麁

果を生じた極微は滅して無常とならなければならない。若しも後者であるとするならば陶師に思慮や勤労がある如く極微にも思慮等があるといふ不合理を来たすであらう。（五）世界の成立に業力を認めるならば何故に極微が生ずるにも業力を許さないのか。若し許すならば極微は無常となり、若し許さなければ極微は原因無くして生ずるといふ不合理を犯すことになるであらう、といふのである。

更に唯識二十論や、觀所緣論等は有部派の極微説を破して（一）七極微の聚合たる一微は眼識に依て覚知せられると説くけれども、一微は七極微の聚合である限り既に假法である。然るに一方假法は眼識の対象たり得ずとするのであるから一微が眼識に依て覺知せられるといふのは自己矛盾である。（二）又一極微を中心に六方より六極微が取り圍むといふならば一極微に六方があることになり極微は無方分なりといふ説と矛盾する。（三）極微に長等の形相が有るといふけれとも形相は假法の上にあつて実法たる極微の上に有るべき筈はない、と。

以上の反駁の中で、中觀派は固定的な実在が在るといふ考へを否定し、瑜伽派は心外に法が実在するといふ考へを破せんがために極微説を攻撃したのであるが、一面又瑜伽論は聚合の物質を分析することに依て対象の無常觀を修し之に依て煩悩を断ずることになるとの理由から、一度否定した極微説を実踐的要求から再び採用することにした。併しそれは飽く迄假法としての極微であつて実在としてのそれではない。

最後に極微説を採用して空の概念を闡明ならしめようとした羅什と覚賢との問答を掲げて本論稿を終りたいと思ふ

什問うて曰く、法は云何んが空なりや。

答へて曰く、衆微は色を成ずるをもつて色には自性なし。故に色と雖も常に空なるなり。又問ふ。既に極微を以て色を破して空なりといはば、復た云何んが微を破するや。答へて曰く、群師は或は一微を破折すといふも我が意の謂

は爾らず。又問ふ、微は是れ常なりやと。答へて曰く、一微を以てあるが故に衆微は空なり、衆微を以てあるが故に一微は空なり、と。

此問答の通訳に当つた宝靈は其意味を充分理解することが出来なかつたので、一般の人人は覺賢を極微常住論者と見做した。そこで其後覺賢は更に之を解釋して、

夫れ法は自より生ぜず。緣が会するが故に生ずるなり。一微に緣るが故に衆微有り、微には自性なきを以ての故に則ち空と爲すなり。寧ぞ一微が常にして空ならざるを破せずと言ふべけんや。

と述べたと傳へられてゐる。

空は單に物を分析して達せられるべきものではなく、相依相資の関係卽ち一卽一切の緣起の関係の上に於て把握せらるべきものである。凡てが相依相資の緣起関係に於て成り立つてゐるのであるから其処には固定的常住な世界の究竟の單一体としての極微の如きものは存在し得ない筈である。玆に我々は今後の原子説理論に対して深い示唆を読み取るべきである。（參考文献、拙稿「極微論」）

昭和二六年二月十一日　　身延山端場之坊に於て放毫